

北海道家畜管理研究会創立40周年を迎えて

松田 従三 (2002~2004年度会長、北海道大学)

本研究会の成り立ちを振り返ってみると、40年前、1965年5月10日に札幌市の酪農研修センターで設立総会が開かれている。この総会後には、アメリカ農務省中央研究所プロジェクトエンジニア、ドクター・ジム太田氏による「家畜、家禽のための近代的な管理施設について」という特別講演が行われている。研究会は、この講演会を開くための受け入れ団体として作られたと聞いている。ただすでに北海道では、酪農、養豚が盛んになり始めたころだったので、畜舎や環境の情報交換、研究の場として研究会を作ろうという機運があって、ちょうど良い機会であったらしい。1965年8月には道立新得畜産試験場で第1回研究会が開かれ、翌年3月には北大農学部で第2回研究会が開かれ活発に活動を開始した。第1号の会報が発行されたのは、1966年8月で65年度の一般会員数は96名、会費300円、賛助会員数24団体であった。その時の名簿を見ると現在でも会員の方の名前が何名か見受けられる。第1号会報には東大内田研究室の湿り空気線図が折り込まれており、畜舎の室内環境への意識が高かったことがうかがわれる。

私が研究会と関わったのは北大農業工学科2年生の時、会報第3号に折り込まれている牛舎配置図のうち何枚かは私がトレースしたものである。いいアルバイトだったようなかすかな記憶がある。研究会に入会したのは助手になった44年10月以降であったのだろう。46年6月発行の会報第4号から名簿に出ている。それ以来、広瀬先生、吉田先生、池内先生、朝日田先生、上山先生の下でずっと下働きをしてきたことになる。

私の回顧談はこれくらいにして研究会のこれからを考えてみたい。

近年本研究会では、酪農を主体として現地研修会、シンポジウムを開催している。北海道酪農は本研究会が設立した当時に比べて規模・質ともに大きく発展してきた。そして今、ほぼ飽和状態にあると思われる。昨年2005年の後半からは、牛乳の生

産調整も再び始まっている。酪農家の高齢化、後継者不足などが原因で、酪農家数も年々減少してきている。酪農家の減少は、農村社会の崩壊など深刻な問題も起こしているが、環境問題から考えると、酪農家の跡地の利用によって適正規模化がだんだん進んで来るのではないと思われる。適正規模とは何頭かという議論もあるが、いわゆる持続的発展が達成される規模ということである。持続的発展というのは、当然環境的でもあるが、大事なことは経済的に成り立たなければならないということである。適正規模の中には1,000頭を越すギガファームもあろうし、規模を縮小したマイペース酪農的なものもあろう。北海道は来年度から肥料成分の施用量から、適正規模頭数を示すらしい。これは頭数削減につながるかもしれないが、北海道畜産の戦略として非常に好ましいものではないだろうか。家畜ふん尿排泄量と、その需要可能な農地面積とのバランスをとる環境に優しい畜産は、北海道以外ではやりたくてもやれないことである。これは北海道の大きなアドバンテージである。経済と環境とは往々としてトレードオフの関係にあるが、こと北海道の環境を考慮した畜産と畜産の経営に限っては、共に進むことができるのではないと思われる。

このように北海道畜産は、ますます環境を考慮したものを目指すことになるであろう。畜産に関連している人々は一致して、そのように道を進むことになるであろう。そのためには研究者も大同団結したらどうであろうか。現在、北海道畜産学会、北海道草地研究会、それに本北海道家畜管理研究会がある。かなりの会員が重複して、それぞれの学会・研究会に所属している。各学会・研究会の会員数の減少も目立ってきた。この際、新会長の干場先生を中心として創立40周年を契機として、これら学会・研究会の合同を是非検討して欲しいものである。そして合同した研究会が、北海道畜産とともに、ますます盛んになることを願っている。